

# 詩人哲学者のパリ体験

—九鬼周造のこと—

山 崎 順 子

## 1. はじめに

九鬼周造の作品においては殆ど哲学と文学の境界が見究め難い。戦前の名著に数えられる「『いき』の構造」(1930)、「偶然性の問題」(1935)から晩年の「日本詩の押韻」(1940)、「文芸論」(1941)に至るまで、それらは哲学という固苦しい思弁の領域を超え、時には生々しい官能の匂いさえ漂う文学的香気を感じさせる。九鬼自身、「私はただひたすらに真と美の永久の静けさを求めて、少数の読者と共に、哲学と文学との間の小道をさまよいながら、思索し、感覚し、憧憬することを願っている」(文芸論の序)と述べている。

九鬼の作品が今日どのように評価されるにせよ、彼の思索と感覚と憧憬がこぼへの執着、殊に日本的表現を巡ってなされていることは否めない。ユニークな日本文化論とされる「『いき』の構造」の序説に読まれる如く、「一定の意味は『言語』によって通路を開く」のである。我々はこの作品が、彼の足かけ九年にわたるヨーロッパ留学から帰国し、京都大学哲学科講師に迎えられた(1929)直後に発表されたものであることに注目したい。彼はこの稿の構想をヨーロッパ、殊にフランスにおいて得ている(これは、「偶然性の問題」にも言えよう)。ただし、彼の留学時代の勉強と体験のありようを伝えるものはまとまった記録として残されてはいない。九鬼の留学中の消息を知る手掛かりは、フランス滞在中、S.K. という匿名で「明星」に投じた詩と短歌を、その没後天野貞祐が一冊にまとめた「巴里心景」(1942)があるのみである。しかし九鬼の思索と感覚及び憧憬の全てのモチーフはここに籠められている。天野は後記の中で、「彼の哲学の背景を知らんとする者には最もよき資料を提供する」と述べて故人を偲ぶよすがとした。

## 2. 矛盾の人

「彼の生涯には嘗って幸福の光は照らされなかったかも知れない。彼が常人であったならば幸福の道は幾筋も眼前に横たわっていたともいえる。けれどもその普通の幸福に生きるにはあまりに強い矛盾を蔵した人であった。極端に理性的であって同様に感能的である。一方には享樂に惑溺しながら同時に他方には純粹理論の研究に精進努力する。斯ういう性格の矛盾は決して幸福を招来する所以ではない。」と天野は九鬼の生涯を回顧している。

九鬼周造は1888(明治21<sup>1)</sup>年)、父隆一と母波津との間に第四子として生まれている。隆一は旧三田藩士星崎貞行の次男として幼少の折、旧綾部藩家老九鬼隆周の養子となった。維新時には藩主に版籍奉還を説くなど開明性をあらわし、維新後は典型的な文部官僚の道を辿り、周造誕生の当時は特命全権公使として在米していた。母波津は祇園の名妓であったと言われるが在米中周造を懷妊、隆一の配下であった岡倉天心に伴われて帰国、以後天心と情を通じ、隆一と別居、のち破婚に至る。周造は母に引き取られて陰影の濃い少年時代を送ることになる。周造の母への慕情と、父および天心に対するアンビヴァレンツな感情とが、彼の「矛盾」に充ちた性格を形成するのに大きく与ったとすることができよう。偶然と運命への深い感情もその生い立ちに由来している部分が多い。母は周造の回顧によると、茶道、生け花、琴、和歌の嗜みが深く<sup>2)</sup>、周造の日本文化への関心を培ったし、「母を悲惨な運命」に陥れた岡倉天心からは、嫌悪を超えて精神的な影響を受けた。在欧中、天心のBook to TeaとThe Ideal of the Far Eastを読み耽ったという記録もある。

九鬼周造は1905(明治38<sup>4)</sup>年、父の辿った外交官への道を目指して第一高等学校独法科に入学するが、在学中プラトンの「饗宴」篇に魅了され、哲学を志して父の軌道を離れ、1909年東京帝国大学哲学科に入学、ケーベル博士に傾倒する。この間生涯の友となる天野貞祐、岩下壯一、児島喜久雄と相識った。殊にも厳格なカント学者となる天野、カトリック司祭となる岩下との交情は、日本の精神史の中で異彩を放つように思われる。<sup>5)</sup>後年家庭の波瀾の中にもまれる九鬼にとって、つねに魂の司祭として彼に関わったのが岩下であり、放蕩無頼のパリ生活の中からその学才を惜しんで日本に引き戻したのは天野であった。児島については後に、「巴里心得」の中で、「君も僕も相変わらず変わり者／学生の時代、よく一夜を語り明かして／君は翌朝帰って行った。」とパリでの再会

を歌っている（「私の一日」）。

九鬼の東大卒業は1912年。成績優秀のため特選給費生となり、大学院に入学して1921年まで在籍したが、1921年結婚、新婚旅行を兼ねてヨーロッパに赴き、そのまま、足かけ9年間に滞在する。父からバロンの称号を受けつぎ、戦前の特権身分を享受したに違いないが、その矛盾に満ちた魂の彷徨は止むことがない。

九鬼の身を置いた頃のドイツは、第一次大戦敗北による深刻な経済的疲弊に喘ぎながらも、清新な学問的気運を抬頭させていた。彼はその幾つかの中心地、ハイデルベルグ、マールブルグ、フライブルグの大学を訪ね、リッケルト、フッサール、ハイデッカーから新カント派、現象学について学んでいる。

《心いう「この頃痛し」ややありてたましいのいう「カントに還れ」

<sup>ふみだな</sup>  
《書棚の認識論を手にとりていつしか積みて塵を拂いぬ

とは、この頃のことを歌ったものであろう。

次いでソルボンヌに学ぶことになるが、九鬼がいつドイツからフランスに移り住んだのか、年譜を見ても明らかではない。

「巴里心景」所収の詩稿「秋の一日」には、児島喜久雄の帰朝を送り、シャンゼリゼーの並木を歩きながら、そういえばA（注、天野貞祐）が日本に帰ってから一年たった、と回想しているが、当時学習院高等学校教授として一年間の留学期間を得、ハイデルベルグのリッケルトについたのが1923（大正13）年であるから、この詩稿は1924年秋に書かれたことになる。

《もう十何年前になってしまった／高等学校や大学の頃／三人でよく淀橋の水道の堤を散歩したっけな／…／三人とも女のことなどを話題にのせたことは／唯の一度もなかったな／僕はあの頃が恋しい／まだまだ希望にみちていた／人生は美しかった。

九鬼にとって回想は常に美しい。

《あゝ、セエヌの方を見給え／澄んだ空にかかっているあの三日月／プラタヌの木立の上に瞬いているあの美しい星、／混沌より出て混沌に入るいのち、／永遠の中にまたたく短い人生／君も僕ももう半を過ぎようとしている／Nel mezzo del cammin di nostra vita…／僕はやっぱり淋しいよ／

《闇を辿る者の孤独、見えざる影を追う者の悲哀、形而上学のない哲学は寂しい、／人間の存在や死を問題とする形而上学が欲しい。

この詩稿の書かれた頃にはまだハイデッカーの「存在と時間」（1927年）は世

に現れてはいなかった。そしてベルクソンはすでに晩年を迎えている。フランスの思想界ではこのころ、反ベルクソンを代表するアランが全盛期を迎えていた。「現時のフランスには、ベルクソンに正反対の哲学的傾向を示しているものがある。その代表者はアラン（本名シャルチエ）である。而してベルクソン風の世界観に反対して、デカルトの二元論を復興しようとしている。……熱心な非戦論者でありながら、ロマン・ロランの様に外国へ逃れず、年齢が兵役年齢を経過しながら志願生として世界大戦に一兵卒として加わったということが青年間にはなかなか大きな印象を与えているようである。若しソルボンヌ又は高等師範学校の学生に仏蘭西現代の最大哲学者は誰かと聞くなれば、彼らは何の躊躇なくアランと答えるであろう」と九鬼は書いている。とは言え九鬼自身は、人間はみずから強く意志することによって救われるというアランの人生哲学に共感を呼び起こされることなく、却ってその批判者となり、パスカル全集の編纂者ブランシュビックに近づいているのである。九鬼は1928年12月、帰国の途上、ワシントンに駐在大使として着任したポール・クローデルをたずねているが、「アランは詩を書いたことがない」というクローデルの言葉にいたく共鳴している。ところで、60歳のクローデルは、ちょうど20歳年下の日本人哲学者との会話をどのように受けとめたのであろうか。クローデルは、人との出会いや交わした会話及びその印象など、かなり詳細にわたって日記に書き留める作家であり、さらに、米国に着任する直前まで大使の任にあった日本に対しては、終生深い関心と憧憬を抱き続けた人であるが、九鬼に関する記載は、日記にも書翰等にも発見することができなかった。九鬼は、駐米公使の父隆一の関係からクローデルをたずねているので、あるいは外交資料をさらに綿密に調査すれば何らかの痕跡が残されている可能性はあるが、九鬼の側からもクローデルの作品について言及していることはなく、双方ともに、特別の感銘を受ける出会いではなかったと想像される。「いき」の哲学者九鬼が、ボードレールのダンディズム、デカダンスを語ることはあっても、クローデルについて語らぬのも道理かも知れない。ここではただ、彼のアランに対する批判的立場、さらにその背後に感じられるベルクソンへの傾倒を傍証する会見として記しておきたい。

### 3. エピクロスの徒

《灰色の抽象の世に住まんには濃きに過ぎたる煩悩の色

九鬼は後年、「私の血に交じって流れているものは意志の哲学の要素よりも享樂の哲学の要素の方が遥かに多分である」と告白している<sup>7)</sup>。

《酔い痴れて更けし酒場に眠れるも青き瞳の君ゆえとせん

《ひと夜寝て女役者の肌にふれ<sup>パリイ</sup>巴里の秋の薔薇の香を嗅ぐ

など殆ど頹廢ときびすを接するような「巴里心景」も、彼の形而上的孤独から生まれたものではなかっただろうか。それを物語る「孤独」と題する詩がある。

《孤独！／あまりにも尊き響／汝等はその調べを／聞きし事なきか。／汝等は形而上的の／孤独を知らざるか。／かの厳しき<sup>いつく</sup>實在の姿を／見しことなきか。

《ドン・ジュアン<sup>はずか</sup>の血の幾しづく身のうちに流れることを恥しとせず

とも歌った九鬼は、同時にドン・ジュアンのもつ憂愁と倦怠を知る人となる。

《小雨ふるシャンゼリゼエの秋の異邦の人ほうなだれてゆく

《夜の街路に迷いてつぶやきぬ「われの心も同じ闇なる」

《麻薬にも似るものを得て忘れんと<sup>パリイ</sup>巴里の町の日も夜も歩く

官能と快樂を求めてパリの町を彷徨する彼はすでに 30 才台も半ばを超えた。彼がつねに想起する向<sup>むこうがおか</sup>陵の芝生で夢を語り合った友人たちは日本の各界で中堅として活躍しているだろう。九鬼は自嘲する。

《清き顔ほそれる顔の「さびしさ」と「わびしさ」またも我をとり巻く

《愚かさも程こそあれと身に言ひぬまた嘆くとも笑うともなく

長く離れた家郷への慕情に烈しく駆られるのはそんな時ではなかっただろうか。

《木犀のほのぼの匂う<sup>ふるさと</sup>故郷を秋の晴るれば恋しとぞ思う。

#### 4. 粹への郷愁

《母上のめでたまいつる白茶いろ<sup>はやり</sup>流行と聞くも憎くからぬかな

《ふるさとの「粹」に似る香を春の夜のルネが姿に嗅ぐ心かな

《ふるさとのしんむらさきの節恋しかの歌沢の師匠も恋て

《うつむきて化粧をなおすたおやめの横顔をそとぬすむ幕あい

これら視覚・嗅覚・聴覚を通して歌われている美は、のちの「『いき』の構造」の中に粹の表現形態として再現されてくるであろう。たとえば楽曲における「いき」が歌沢の「新紫」のうちの「紫のゆかり」の所に、あるいは、白茶が「いき」<sup>8)</sup>として好まれる所に……という風に。九鬼はやがて民族的解釈学の方法を

見出し、『『いき』は武士道の理想主義と、仏教の非現実主義とに対して不離の關係に立つ』ものと結論づけるのであるが、「巴里心景」では熱烈な「いき」へのエロスの発動<sup>9)</sup>を見出す。このプラトンのエロスは、彼の美学の全ての根底に存在している。

《片われが全き姿にかえりぬと「宴会篇」の客に告げまし

短歌として拙劣であり、意味もにわかには判然としないが、この歌によまれているプラトンの「饗宴」は、九鬼にとって原体験とも言うべき意味を持っていた。プラトンのこの書は彼を「或る高きもの」へといざなう強烈な魅力をもつものであり、「文芸復興期の人々が聖書と共にプラトンを至宝と考えたのは余りにも当然」で、「人間を永遠に悩ませ喜ばせる憧憬とか恋愛とかいう気分が秀抜無比な把握力によって解明」される「人間味あふれる」書なのであった。

後年、九鬼は文学論「情緒の系図」<sup>11)</sup>を著しているが、この中で、プラトンのエロスをひいて、「恋しさ」や「寂しさ」について語っている。

想起<sup>アナムネシス</sup>によってプラトンのエロスが成立するのは、「恋しさ」が「懐かしさ」によって媒介されるためであるが、ここで特筆すべきは、エロスの本領が過去の追憶としての憧憬にとどまらず、未来の実現を要請する理念への憧憬にある点だと言う。プラトンは、「恋しさの心理的未来性の事実の説明に形而上的過去性の仮定を導入した」のである。

「恋しさ」は対象の欠如を基礎として成立し、それ故、つねに「寂しい」という感情を背後に持つ。「恋しいとは、一つの片割れが他の片割れを求めて全きものとなろうとする感情であり、寂しいとは、片割れが片割れとして自覚する感情である」と彼は述べている。九鬼自身の思索と感覚と憧憬は、完全なる合一を求める片割れへの「恋」ではなかっただろうか。官能は理性を求め、そして、フランスにいる自分は日本を求めて。パリで逸楽の日々を過ごしつつも、彼が日本を「我が魂のあらゆる意味での源」<sup>12)</sup>と語るのも首肯されよう。

## 5. 《Bergson an Japan》

《範疇にとらへがたかる己が身を我となげきて経つる幾とせ

《現実のかおりのゆえに直観の哲学を善しというは誰が子ぞ

九鬼は1928（昭和3）年、天野貞祐の奔走により、京都帝国大学文学部哲学科に招かれ、「高等遊民」と自嘲したヨーロッパ生活に終止符を打つのだが、そ

れに先立ち、病氣療養中のベルクソンを国連の石井公使に伴われて見舞う機会を得る。

たまたまその日、「ヌーベル・リテレール」Les Nouvelles Littéraires 紙の主筆フレデリック・ルフェーブルがベルクソンのノーベル賞記念号の出版打合せに来訪、九鬼はその場で〈Bergson an Japon〉の執筆を依頼される。ヨーロッパと日本の時間的接点に立って書かれるこの論文はきわめて興味深いものになるであろう。

九鬼はまず日本近代の開幕期に紹介されたアングロ・アメリカの文明にふれ、スチュアート・ミルとスペンサーの功利主義、のちにはプラグマチズムが導入されたが、「幸いにして日本精神はこの種の思想を全面的に受け容れることに賛成しなかった」と述べ、次いで1885年頃よりドイツ哲学が入り、殊にカントははじめて我々に深い尊敬を抱かせたとして、カント、フィヒテ、ヘーゲルの評価、新カント派の運動へとテーマは移り、ヘルマン・コーエンとハインリッヒ・リッケルトが称賛されていた1910年の頃、ベルクソンの名が登場したと記している。

日本におけるベルクソンと言えは、まず「創造的進化」、「物質と記憶」、「形而上学入門」の訳出があるが、それらの思想は日本の代表的科学者西田幾多郎によって早く知られ、彼の省察は、純粹持続の直観を受け入れつつア・プリオリの価値の擁護を目的とするものではあるまいか、と紹介している。

九鬼自身のベルクソン評価については、この国の *esprit* が新カント学派（彼はリッケルトに学んだことを忘れまい）の批判的形而主義によって「過度に乾燥されてしまった」が形而上的直観 *intuition métaphysique* という「天来の滋味」によって解放されたとし、自らのベルクソンへの深い関与を表明している。

「ベルクソン氏は我々に『出来合の概念』という既成服に決して満足しないように勧め、『寸法に合わせた仕事をする必要性』を我々に示した。（中略）その生命を深く究め、一種の知的聴診によって魂の鼓動を感じようとする。」と述べ、「ベルクソン氏は我々に『絶対を再生させてくれた』」としている。またベルクソンに従って、哲学することとは「直観の努力 *effort d'intuition* によって具体的實在の内容に身をおくこと」と定義する。

絶対の再生のためには、理念の模倣ではなくして、選択という主体的契機が働かねばならない。九鬼によれば、日本において見られるような、直観による絶対の把握は、「禅」の瞑想の道であり、また、「意気」の理想主義道徳を支え

る神道の思想でもある。この道こそベルクソン哲学の受容を切り開いたものであるという。そればかりでなく、ベルクソンの流動の思想には、仏教思想と深く通底するものがある。まず第一に、「水の流れ」のイメージとして示される「持続」の觀念が、正しく、「諸行無常，生成流轉」la fuite sans repos des choses, un flux d'eau という仏教の根本概念と合致していることが挙げられる。さらに、ベルクソンが「<sup>アンチノミー</sup>二律背反の定立と反定立を同時に、かつ同一の地盤で受容する」可能性を認めるとき、それは涅槃即仏陀 Nirvāna est Buddha, 無即有 Néant est Être という禪の逆説的真理に限りなく近いことを九鬼は挙げている。ヨーロッパ的伝統で得たものを日本的伝統において把え返すという九鬼自身の方法論がここに見られると言えよう。

## 6. 東洋的時間とシシュフォスの神話

九鬼はフランス滞在中、パリ近郊のポンティニーに於いて二つの講演を行った(1928年8月)。この講演に加筆し、Philip Renourd 社から発行されたのが、Propos sur le Temps という小冊子である。現在は「東洋的時間」としてかなりの字句が修正、あるいは削除されて刊行されている。

彼はここで輪廻の時間<sup>14)</sup>、回帰的時間について語っている。冒頭にギュヨー、コーヘン、ハイデッガー、ベルクソンらの西欧的時間論の系譜がウパニシャッド、ストア派、ソクラテスと対比して論じられているが、九鬼の立論は、意志の問題をそこに立て、時間の経過を分析し、いわば終末に向かって直線的に流れる時間の概念を飛びこえて、「輪廻」と呼ばれるものの反復性と循環性、そしてこの時間からの解脱ということに向けられている。

「問題の時間は、其の為に『四海の水より更に多量の涙を流した』ところの輪廻の時間である。人はこの時間を解脱せねばならぬのである。」

これは仏教でいう意志の断念、すなわち「涅槃」である。意志のかわりに欲求という語をあててもよい。欲求は、我々がこれを幻影と感じる時「無」となり、存在の激流は止められる。

しかし日本においては、仏教に加え封建時代に「武士道」なる第二の道徳的理想が発達したと彼は続ける。

「武士道は意志の肯定である。否定の否定である。或る意味に於いて、涅槃の廃止である。夫は自己本来の完成をしか念じない意志である。それ故に仏教に



として最高の悪であった意志の永久的反覆が今や最高の善となったのである。」

それはカントの言う「善意志」である。遂に完全に実現され得ぬこと、そして常に徒労に終わることを運命づけられている無限なる善意志、勇敢に輪廻と直面し、永久に反覆する「失われた時間」にも介意することなく、「涯しなき継続の中に永遠を見出」さなくてはならない。

九鬼の文体はここでは極めてパトス的である。それは元稿の「Propos sur le Temps」がフランス人の聴衆に向けての講演であったためでもあろう。武士道の理想を語りながら、彼は当時なお、ヨーロッパの人々の話題から消えていなかった関東大震災（1923年9月）にふれ、

「五年前東京の大半を破壊した大震災の直後、我々は東京に地下鉄の建設を始めた。私はその時ヨーロッパにいた。私は『何故日本人は百年毎に殆ど周期的に襲われる大地震に常に繰り返して破壊される運命を持った地下鉄を建設するのであるか』という問いを受けた。私は此に答えた。『我々日本人の関心は企図そのものにあつて目的物にはない。我々は地下鉄を建設しようとする。地震がこれを破壊するであろう。然り而うして我々は常に再び始めるであろう。我々が尊重するのは意志そのものなのである。自己自身の完成を求める意志なのである』と語る。

同じ文脈の中で「シシュフォス」の神話について今日の我々の関心を引く文章がある。

「常に皮相だと思うのは、ギリシア人がシシュフォスの神話の中に、永久の責苦を認めたことである。彼が山頂迄岩を引き上げると、岩は転げ落ちる。かくして彼は永久にこれを繰り返すのである。此事の中には不幸があるであろうか、又刑罰があるであろうか、私はこれを解しない。……彼の善意志、常に新しく始めんとする確固たる意志、常に岩を引き上げようとする意志は、この繰り返しそのもののの中に全道德を、従って彼の全幸福を見出すのである。」

我々はここに時代をこえて突如としてアルベール・カミュの世界が現出するのを見て驚く。カミュの「シーシュポスの神話」の出版は1942年であるが、その末尾のよく知られている文章を引用してみよう。

「ぼくはシーシュポスを山の麓にのこそう！ひとはいつも、繰り返し繰り返し、自分の重荷を見出す。しかしシーシュポスは、神々を否定し、岩を持ち上げるより高次の忠実さをひとに教える。かれもまた、すべてよし、と判断しているのだ。このとき以後もはや支配者をもたぬこの宇宙は、かれには不毛だと

もくだらぬとも思えない。この石の結晶のひとつひとつが、夜にみたされたこの山の鉱物質の輝きのひとつひとつが、それだけで、ひとつの世界をかたちづくる。頂上を目がける闘争ただそれだけで、人間の心をみたすのに十分たりなのだ。いまや、シーシュポスは幸福なのだと想わねばならぬ。」(清水徹訳、新潮文庫)

日本的「いき」を語り、「偶然性」に思いをこめる九鬼文学と、不条理の文字との対照にまで、我々の興味を誘う文ではないだろうか。

## 7. おわりに

戦後も久しく経ってから、鈴木孝夫氏は、「ことばと文化」(1971年、岩波新書)の中で、日本における西洋文化の受容が、ことばに意味を与える価値体系を無視して、直訳語をもって彼我の優劣を論ずるということによって生ずるゆがみについて論じ、日本的現実をはかる尺度は、日本語それ自体、日本的現実それ自体に求められるべきことを鋭く指摘されたが、九鬼にあってはヨーロッパ体験そのものが、純粋な日本的現実への還帰となった働いた。『『いき』の構造』においては、男女の合一の可能性を可能性のままにとどめようとする「媚態」が、武士道の「意気地」や仏教を背景とする「諦らめ」によって規定され、意識現象としての「いき」として完成する構造が、主として江戸文化、それも文化文政時代を中心に解明されているのであるが、その書き出しの文章が、ヨーロッパの民族体験としての言語、たとえばドイツ語の *Schmuse* やフランス語の *esprit* の中に籠められている独自の意味の詳細な考察から始められていることを見落としてはならないと思う。なお本稿は九鬼のフランス時代を背景とする九鬼文学研究のための「はしがき」であって、「いき」そのものへの言及は別の機会に譲りたいと思う。

### 註記

この論考は、岩波書店発行の『『いき』の構造』(昭和24年10月発行第6刷)のほかは、1981年7月から1982年3月まで、岩波書店から逐次刊行された「九鬼周造全集」(全13巻)によった。本文中「巴里心景」は配布第一巻所収による。文中に記載のない引用は次に列記する。

- 1) 天野貞祐「おりにふれて」後記。全集5巻154ページ
- 2) 九鬼周造「岡倉覚三氏の思出」。全集5巻233ページ
- 3) 同238ページ
- 4) 同
- 5) 九鬼周造「岩下壮一君の思い出」。全集5巻148ページ
- 6) 九鬼周造「仏独哲学界の現状（帰朝船中）」。全集1巻220～231ページ
- 7) 九鬼周造「書斎慢筆」。全集5巻56ページ
- 8) 九鬼周造「『いき』の構造」。126ページ
- 9) 同129ページ
- 10) 九鬼周造「書斎慢筆」。全集5巻46ページ
- 11) 九鬼周造「情緒の系図」。全集4巻170～188ページ
- 12) 九鬼周造全集1巻 巻末の仏文96ページ。Cependant ce pays est mon pays natal, je l'aime avec un attachement ardent. Non seulement mon être entier lui appartient, mais je lui dois tous les aspects de mon âme, je lui dois toutes les nuances de mon cœur, … Je parlerai d'une chose qui est au fond de tous. Je parlerai de l'âme japonaise et de sa civilisation morale.
- 13) 《Bergson au Japon》九鬼周造全集1巻 巻末の仏文88～92ページ
- 14) 九鬼周造「東洋的時間」。全集5巻11～22ページ
- 15) 原題 Albert Camus 《Mythe de Sisyphe 》, 1942, Edition Gallimard